

日本文学部会主催・学会後援 講演会

なまなま 生々とした現実感

— 斎藤茂吉の歌境 —

日時:2011年10月31日(月) 16:35~18:05

会場:東京女子大学 23101教室(23号館1階)

講師:品田悦一 氏(東京大学教授)

斎藤茂吉が「写生」の要諦を「実相に観入して自然・自己一元の生を写す」と規定したことはよく知られている。「自然・自己一元」という言い回しに、主観と客観の二元論に背を向ける態度が表れているが、「写生」とは元来、画家が自己の外部に存在する事物を視覚的に模写することを意味していた。茂吉の言う「写生」は、主客二元論の枠組みから出発しつつ、そこからの脱却を志向するような営みであるらしい。これはどういうことだろうか。

画家が絵筆で行なう行為をことばに置き換えた行為、それが、茂吉の念頭にあった「写生」の基本的イメージだったと仮定してみよう。この場合、絵画に関する茂吉の思索を追跡することが、目下の問題に接近する有効な道筋となりえるだろう。

◆講師のプロフィール

品田 悦一(シナダ ヨシカズ)

1959年群馬県生まれ。1988年東京大学大学院人文科学研究科博士課程(国語国文学)単位取得修了。上代日本文学専攻。聖心女子大学文学部教授を経て、現在、東京大学教授。著書に『万葉集の発明 国民国家と文化装置としての古典』(新曜社)、『斎藤茂吉』(ミネルヴァ書房)、共編著に『【うた】をよむ 三十一字の詩学』(三省堂)などがある。



問い合わせ先:東京女子大学日本文学専攻オフィス

TEL 03 (5382) 6301